

# 第11章 - 4 19世紀欧米の文化

## 1. 18世紀の文化

理性の重視 (→啓蒙主義)、普遍的価値の追求 (→自然法思想) →市民革命へ

**古典主義** (classicism) ……均整・形式美を重視する文化

- 文学…… ゲーテ (独、1749-1832)、シラー (独、1759-1805)  
※ 1770年代、疾風怒濤 (Sturm und Drang) = 感情の自然な発露  
「若きウェルテルの悩み」(G)、「群盗」(S)  
→古典主義大成……「ファウスト」(G)、「ヴァレンシュタイン」(S)
- 絵画…… ダヴィド (仏、1748-1825、『ナポレオンの戴冠式』)
- 音楽…… “ウィーン古典派”  
ハイドン、モーツァルト、ベートーヴェン (1770-1827)

⇕  
しかし、自然法・啓蒙思想の結果としての「フランス革命」は  
「ナポレオン帝政」の出現という矛盾へ (自由の名の下における侵略)  
→ナポレオンに支配された諸国で「国民主義」の芽生え

## 2. 19世紀前半の文化・学問

**歴史学派**……個別の歴史的条件を重視する学問的風潮

- 史学 { ランケ (独、1795-1886)  
史料批判による実証史学の初め、近代史学の父  
ドロイゼン (独、1808-84) ……「ヘレニズム」という語の創始者  
ブルクハルト (スイス、1818-97) ……『イタリア・ルネサンスの文化』(1860)
- 歴史学派経済学…… フリードリヒ・リスト (独、1789-1846)  
自由放任主義は発展途上国に不利 → ドイツ関税同盟提唱
- 歴史法学…… サヴィニー (独、1779-1861)  
“民族固有の法” という考え方 (⇔ 普遍的な自然法思想)

**ロマン主義** (romanticism) ……均整や理性よりも感情を重視する文化的風潮

- 文学 { 独… ノヴァーリス (1772-1801、『青い花』)  
ハイネ (ユダヤ系、1797-1856、『歌の本』)  
英 バイロン (1788-1824、→ギリシア独立戦争)  
仏 ユーゴー (1802-85、『レ・ミゼラブル』)
- 美術…… { ドラクロワ (1798-1863) 『民衆を率いる自由の女神』 (→七月革命)  
『キオス島の虐殺』 (→ギリシア独立)  
ゴヤ (スペイン、1746-1828) 『5月3日の処刑』 (→ナポレオンへの抵抗)
- 音楽…… ロマン派  
ドイツ・ロマン派 シューベルト → メンデルスゾーン → シューマン → ブラーム  
ヴァーグナー → ブルックナー → マラー → R・シュトラウス  
ショパン (ポーランド・仏、1810-49)、バルリオーズ (仏、1803-69)

→ 19世紀後半  
「国民楽派」……スメタナ、ドヴォルザーク (チェコ)、  
ムソルグスキー、チャイコフスキー (ロシア) etc.  
「イタリア・オペラ」……ロッシーニ → ヴェルディ → プッチーニ

しだいに、科学の発達、社会問題の顕在化 → ロマン主義の非現実主義に対する批判

### 3. 19世紀後半の文化

ロマン主義に対する反動→写実主義、自然主義などへ

**写実主義 (realism)** ……人間・社会をありのままに描写

- 文学…… スタンダール (仏、1783-1842、『赤と黒』)  
バルザック (仏、1799-1850)、フロベール (仏、1821-80)  
トゥルゲーネフ (露、1818-83、『父と子』)  
ドストエフスキー (露、1821-81、『罪と罰』)  
トルストイ (露、1828-1910、『戦争と平和』)
- 彫刻…… ロダン (仏、1840-1917、『考える人』)  
絵画…… ドーミエ (仏、1808-79)  
クールベ (仏、1819-77、パリ・コミュンに關係して投獄されスイスに亡命、『ブルードンの肖像』)

**自然主義 (naturalism)** ……人間を科学的に観察し、社会の矛盾や人間性の悪の面を描写

- 文学…… ゾラ (仏、1840-1902、→ドレフュス事件)  
モーパッサン (仏、1850-93、『女の一生』)  
イブセン (ノルウェー、1828-1906、戯曲『人形の家』 = 演劇史上・女性解放史上も重要)
- 絵画…… ミレー (仏、1814-75、『落穂拾い』)  
コロドー (仏、1796-1875)

**印象派 (impressionnisme, フランス中心)**

- 絵画……前期 = マネ (1832-83)、モネ (1840-1926、『印象・日の出』→派名の由来)  
ドガ (1834-1917)、ルノワール (1841-1919、『ムラン・ド・ラ・ギャレット』)  
後期 = セザンヌ (1839-1906)、ゴーガン (1848-1903、→タヒチ島移住)  
ゴッホ (オランダ、1853-90、晩年発狂し自殺)
- 音楽…… ドビュッシー (1862-1918、『海』)、ラヴェル (1875-1937、『ボレロ』)

**耽美主義 (aestheticism)** ……善悪の倫理的価値を無視し、ただ「美」のみを最高の価値として追及  
ボードレーン (仏、1821-67) ……詩集『悪の華』  
ワイルド (英、1856-1900、艶色事件をおこして入獄) ……戯曲『サロメ』

**象徴主義 (symbolism)** ……ロマン主義・自然主義の双方に対する反動、象徴的表現を重視  
メテリック (ベルギー、1862-1949)  
『青い鳥』、『ペレアスとメリザンド』(→ドビュッシーがオペラ化)  
ヴェルレーヌ、マラルメ、ランボーの3詩人

### 4. 科学と思想

ダーウィン (英、1809-82) ……“進化論” (1858『種の起源』)  
「すべての生物は環境に応じて進化する」  
キリスト教的世界観の否定、人間・生物・自然への畏敬の念  
また、社会進化論へも影響

フロイト (奥、1856-1939) ……精神分析学  
人間の深層心理の分析により理性への信仰を打ち砕く

※この2人は人間の「人間観」を決定的に変えた。→文化・哲学に大きな影響

マルクスも含めた3人は広い意味での自然主義 (上記説明参照)

<哲学>

◆ 功利主義 哲学 (イギリス、utilitarianism)

ベンサム (1748-1832) …… “最大多数の最大幸福” = 民主主義の理想

J.S.ミル (1806-73) …… 著『自由論』

◆ 社会学

コント (仏、1798-1857) …… 実証主義 を提唱、**社会学** を創始

ハーバート=スペンサー (英、1820-1903) …… **社会進化論** ←ダーウインの進化

◆ ドイツ 観念論 哲学 (カント以来)

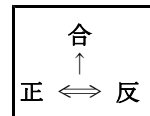
フィヒテ (1762-1814) …… ナポレオン占領下のベルリンで「ドイツ国民に告ぐ」連続講演  
言語学者フンボルト (地理学者の兄) の創設したベルリン大学の初代総長に

シェリング (1775-1854)



ヘーゲル (1770-1831)

理性の能力が拡大・神格化して、絶対精神の哲学となる  
精神の働きの法則 = 弁証法 (右図参照)



↓  
ヘーゲル右派…… 国家哲学としてプロイセンの御用哲学化  
ヘーゲル左派…… フォイエルバッハ (唯物論) を経てマルクスへ

マルクス (独、1813-83) …… 唯物論, 科学的社会主義

社会を「上部構造」(政治・法律・宗教・道徳・芸術・哲学・科学) と  
「下部構造」(物質的・経済的な社会状況) とに分ける

→ 「人間の意識は、社会の物質的の下部構造の産物である」

◆ 実存主義 哲学

「人間とは何か」 = 主体性・創造性の回復をめざす



資本主義の発展 = 賃金労働者の増加 → 人間疎外

近現代における政治・経済機構の巨大化 → 個人の社会への埋没 → 理性への信仰が薄れる

キルケゴール (1813-55、デンマーク、有神論的)、著書『あれかこれか』

「自分にとって真理であるような真理」を見出すことが重要

→ 最後には、不安を抱きながらも、神への信仰に生きる決断に至る

「美的実存」→「倫理的実存」→「宗教的実存」

ニーチェ (1844-1900、ドイツ、無神論的)

著『ツァラトストラはかく語りき』…… 「神は死んだ。超人として生きよ!!」

人生に意味はない。(=ニヒリズム)

「無」の人生を「これが人生だったのか」と運命として引受け、

「力への意志」を奮い立たせて力強く生きよ!!

→ 自己肯定的で生命力あふれた生き方を主張

著『力への意志』

全ての生命ものは、一切の抵抗を退け強大になろうとする意志を持っている  
キリスト教道徳は「奴隷の道徳」だ!! と批判



ショーペンハウアー (独、1788-1860)

世界の本质は、**生存への盲目的意志**であり、全ての個体もその現れである。

(⇔ヘーゲルの理性主義の哲学に対抗)

厭世主義 (ペシミズム)

盲目的意志に駆られ、満たされない欲望を追い続ける人生は苦痛。

→ 「生への意志」を否定することによってのみ苦悩から解脱できる。

(インド哲学研究の影響)

※ 「生への盲目的意志」という考え方はニーチェに大きな影響。しかし結論は全く正反対

◇通信

- モールス (米、1791-1872) ……電信機(1837)→1848年の革命ではすでに実用化  
エジソン (米、1847-1931) ……蓄音機(1876)、白熱電球(1878)、映画(1893)など  
ベル (米、1847-1922) ……電話(1876)  
マルコーニ (伊、1874-1937) ……無線電信(1895)→1901年、大西洋を隔てた交信に成功

◇その他、工業

ジーメンス兄弟 (独、兄ヴェルナー 1816-92、弟ヴィルヘルム 1823-83) ……電気技術者  
ジーメンス=ハルスフェ商会設立(1847)、ロシアの電信網、イギリスで海底ケーブルを建設(のちインド=ヨーロッパ間海底ケーブル)  
1879 電車の実用化→1881 ベルリンで、1883 イギリスで電気鉄道建設

ダイムラー (独、1834-1900)、ベンツ (独、1844-1929)  
1886 両者別個にガソリン自動車開発発明、1926 両社合併しダイムラー・ベンツ社となる  
フォード (米、1863-1947) ……1896 独自にガソリン自動車開発。1899 デトロイト自動車会社→1902 フォード自動車会社  
ベルトコンベア・システムによる大量生産(1913～、T型フォード)

ライト 兄弟 (米) ……1903年、飛行機発明し初飛行(待空時間 59秒)

ノーベル (スウェーデン、1833-96) ……ダイナマイト 発明(1867)、遺言により1901年にノーベル賞設置

◇物理学 ファラデー (英、1791-1867) ……電磁誘導の法則(1831)  
マイヤー (独、1814-78)、ヘルムホルツ (独、1821-94) ……エネルギー保存の法則(1847)

レントゲン (独、1845-1923) ……X線 の発見(1895)  
キュリー 夫妻 (仏) ……ラジウム の発見(1898) (ピエール・1859-1906、マリー・1867-1934)  
※夫人はポーランド出身

放射線の研究→“原子”の世界へ

◇化学 リービヒ (独、1803-73) ……有機化学、(→化学肥料の普及)

◇生物学 メンデル (奥、1822-84) ……遺伝の法則(しかしDNAはまだ発見されていない)

◇医学 パストゥール (仏、1822-95) ……狂犬病予防接種  
細菌学者として他に乳酸菌・酵母菌の発見など  
コッホ (独、1843-1910) ……結核菌・コレラ菌の発見  
→北里柴三郎(ペスト菌発見)、志賀潔(赤痢菌発見)の師

※ ナイティンゲール (英、1820-1910) ……看護婦の地位確立、クリミア戦争で活躍  
デュナン (スイス、1828-1910) ……1864年、国際赤十字 の設立発案

<探検>

タスマン (オランダ、1603-59) ……1642年、タスマニア・ニュージーランド発見  
オーストラリアを周航しながら発見できず、のちにオランダ東インド会社が確認しながら放棄

クック (英、1728-79) ……オーストラリア・ニュージーランドなど探検  
→ハワイで島民に殺される

リヴィングストン (英、1813-73) ・ スタンリー (英、1841-1904)  
……アフリカ内陸探検→列強による植民地化へ

ピアリ (米、1856-1920) ……1909年、北極点到達  
アムンゼン (ノルウェー、1872-1928) ……1911年、南極点到達  
スコット (英、1868-1912) ……1912年、南極点到達、先を越されていたのを知り帰途遭難死